

ハワイ・クレオール研究の諸問題

橋 内 武

1. はじめに—1986 TESOL Summer Institute に参加して

1986年の夏筆者はハワイ大学に滞在し 1986 TESOL Summer Institute (July 7--August 15) に参加、下記の知的活動に参画することによって、ハワイ・クレオールを中心としたピジン・クレオール研究の現状をつぶさに知ることができた。

☆ESL 360 PIDGIN AND CREOLE ENGLISH IN HAWAII (Sato, C. J.), July 7- August 14

☆COLLOQUIUM ON PIDGINS AND CREOLES : ISSUES IN LANGUAGE ACQUISITION AND EDUCATION, August 1st and 2nd.

☆FORUM LECTURES とくに

Sato, C. J., "WAT, BADA YU? --Social Inequality and Linguistic Variation in Hawaii", July 14.

Romaine, S., "Grammaticalization and Language Change", July 30.

Schumann, J. "Acquiring a Language without a Target", August 4.

☆CONFERENCE ON LANGUAGE AS POWER: CROSS-CULTURAL DIMENSIONS OF ENGLISH IN MEDIA AND LITERATURE, East-West Center, August 6-13.

そこで本稿では、研修報告を兼ねて、標題に関してその要点をまとめることとする。

2. ピジン・クレオール研究の成立と展開

ピジンとクレオールが研究の対象となりはじめたのは19世紀末のことであるが、これが言語学の一分野として確立したのは1960年代のことである。いま代表的な文献を挙げれば Hall(1966), Reinecke(1969), Hymes ed.(1971), DeCamp & Hancock eds.(1974), Todd (1974), Bickerton(1975, 1981), Valdman ed.(1977), Schumann(1978), Hancock ed.(1985), Mühlhäusler(1986), Romaine (近刊), Gilbert ed. (近刊) などが並ぶだろう。中でもBickerton(1981)は、言語起源論・言語変化論・言語習得論などにも示唆を与えるため、近年各方面から注目を集めている。

日本では、開港期に横浜ピジンが使われていたが、断片的な記録が残されているのみで本格的な研究は行われていない。(『横浜市稿』参照)一方、日本からのハワイ移民(一世)やその子弟(二世)の使うハワイ・ピジンもしくはハワイ・クレオールについては、Nagara

(1972)の著書や比嘉(1973, 1974)の論文で一般に知られるところとなった。

1980年代になるとかつてハワイ大学に学んだ西光(1982)や田中(幸)(1984)の動向論文が発表され、上記のBikerton(1981, 邦訳1985)とTodd(1974, 邦訳1986)の訳書が刊行されて、ようやくこの分野への関心が高まってきたかに見える。

3. ハワイ・クレオールの研究

ハワイ・ピジン・クレオールの研究は、次の5つの側面から行われてきている。

- A. ピジン・クレオールの社会的歴史的背景
- B. ピジン・クレオールの言語構造
- C. ピジン・クレオールへの態度
- D. ピジン・クレオールと言語教育
- E. ピジン・クレオールの言語文化への寄与

このうち社会的歴史的背景については、19世紀後半から20世紀初頭にかけて盛んになった砂糖きびプランテーション農業がアジア・ヨーロッパ各国からの移民労働者を引き付けたことが重要なポイントである。中でも日本からの移民は特に多く3割を越していた。だからハワイ・ピジンの成立とハワイ・クレオールの形成には、原住民のハワイ語と支配者の英語に加えて移民の母語(複数)が大きく関わったと言えるのである。

文法については、存在詞に‘get’や‘have’が使われること、進行形にポルトガル語の‘estar’に由来する‘ste’が用いられること、語形の上で時制(現在/過去)の区別がなく、‘wen’+動詞で過去を表わすこと、文末小辞に‘eh’が現れることなどの特徴が見られる。そして‘bambucha’(大きい)、『haole’(白人)、『hemo’(脱ぐ)、『hana hou’(もう一度)、『kalakoa’(多彩色の)、『shibai’(ウソ)、『pau’(終り)などの例から解るように語彙には多民族社会ハワイの言語事情が反映している。ただしハワイ・クレオールといっても一様ではなく、ピジンからクレオールへ、クレオールからポスト・クレオールへという史的展開の中で言語的特徴が変化してきており、ローカル色のきわめて濃いクレオール(basilect)から標準英語に近いもの(acrolect)までが連続体(continuum)をなして併存しているわけだから、単純な一般化は致しかねる。

おしなべてバジレクトの話し手は、ホワイ・カラーの職業に就きにくい。ホノルルのカメハメハ・スクールの例を引き合いに出すまでもなく、公教育では英語化教育が強調され、支配階級であるアングロ社会に対して言語的に同化する努力が押し進められている。

ところが、一步学校の外に出ると、クレオールは言語芸術の媒体としての価値を持ち、フラダンス・ショウ、笑劇、弾き語りといった大衆芸能とか地元文芸誌にとって不可欠な要素となっている。

ハワイというと、一般には「常夏の島」、「珊瑚礁の海」といった観光地のイメージしかないが、言語接触によるクレオール化の進んだ多民族社会として捉え直す必要もあるだろう。